

資源評価調査委託事業

スルメイカ漁場一斉調査

清藤 真樹

目 的

太平洋海域におけるイカ類資源の合理的利用、イカ類漁業の操業の効率化と経営安定に寄与するため、スルメイカの漁況予報に必要な分布・回遊、成長・成熟および海洋環境などに関する資料を収集する。

材料と方法

本調査は、宮城県沖から北海道沖の太平洋海域において、北海道、青森県、岩手県、宮城県の試験研究機関、北海道区水産研究所が担当海域を持ち、6月と9月の規定期間中に一斉に調査を行い、その結果を北海道区水産研究所が取りまとめ、漁況予報等に活用している。

1 第1次調査

①期間 平成23年6月2日から6月8日（試験船・開運丸）

②調査項目：海洋観測（35地点、CTDによる水温、塩分測定）

：漁獲調査（14地点、自動イカ釣り機（2連式4～5台）による釣獲試験。種別の尾数、外套長の測定）

2 第2次調査

①期間 平成23年9月1日から9月11日（試験船・開運丸）

②調査項目：海洋観測（32地点、CTDによる水温、塩分測定）

：漁獲調査（8地点、自動イカ釣り機（2連式4～5台）による釣獲試験。種別の尾数、外套長の測定）

結 果

1 第1次調査

海洋観測の結果、津軽暖流域の表面の最高水温ははなはだ低く、50m層はかなり低め、100m層はやや低めで、津軽暖流の水塊深度はやや浅めだったが、尻屋崎東方への張り出しはかなり強めとなっていた。

漁獲調査の結果、14地点中2地点でイカ類の漁獲があった。八戸港に近い沿岸よりの海域1地点でスルメイカ、最も沖合の海域1地点でツメイカが漁獲された。スルメイカの有漁率（漁獲地点/全地点）は7.1%であった。漁獲されたスルメイカは外套長が8cmから13cmの5尾で、1台（2ライン）・1時間当たりのCPUEは0.16であった（図1）。

2 第2次調査

海洋観測の結果、津軽暖流域の表面及び50m層の最高水温はやや高めとなっていた。津軽暖流の水塊深度及び尻屋崎東方への張り出しは平年並みであった。

漁獲調査の結果、8地点中7地点でイカ類の漁獲があった。8地点中5地点でスルメイカ、6地点でアカイ

カが漁獲された。スルメイカの有漁率は62.5%、アカイカの有漁率は75.0%であった。漁獲されたスルメイカの外套長は16cmから26cmで、各地点当たりの漁獲尾数は1尾から28尾、1台（2ライン）・1時間当たりのCPUEは0.04から0.84であった。また、漁獲されたアカイカの外套長は19cmから41cmで、各地点当たりの漁獲尾数は1尾から84尾、1台（2ライン）・1時間当たりのCPUEは0.06から2.79であった（図2、3）。

なお、調査結果は、独立行政法人・水産総合研究センター取りまとめの「太平洋スルメイカ長期漁況予報」及び「資源評価（スルメイカ）」に活用された。

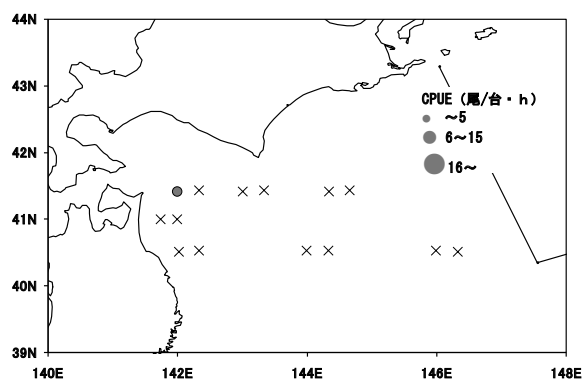


図1 6月調査結果（スルメイカ）

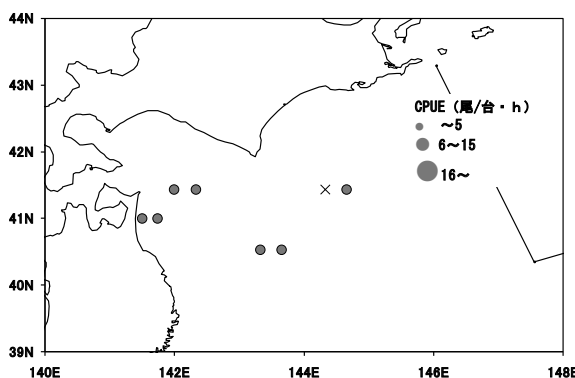


図2 9月調査結果（スルメイカ）

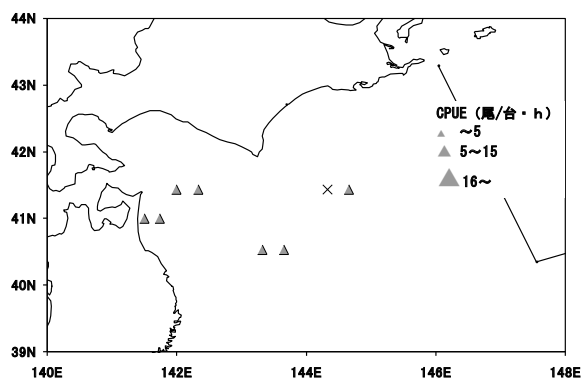


図3 9月調査結果（アカイカ）